

# 大入島・日向泊の地名について

ひうが

大分大学名誉教授  
九州東海大学教授

富 来

隆

(大分市志手)

マックス・ウェーバーが展開した「正当性(支配)の三原理」のうちで、『伝統的』なもの、それをうちやぶり、乗り越えるものとしての、『カリスマ的』なものとの二つは、アジアの社会の特質を理解するためのカギとして、きわめて有効性をもつ。

カリスマとは「超人・超能力者」などの意味であり、先年本誌で『大神氏の始祖惟基を、あかがりの大弥太』ということについて』なる一文を草したとき、カリスマ性を有効な武器として利用させていたのだ。

自分たちの出自を偉いものにみせるために||自分の正当性を主張するために||、たとえば大神氏一族のように祖母岳の大明神(竜蛇神)を始祖と仰ぐのは、日本の

竜蛇神信仰に基づくものであった。蒙古のジンギスカンにみる、蒼い狼(オオカミ・大神)の物語りも、これに劣らないものである。

と同時に、日月星辰を神とし、ことに太陽をその中心神と仰ぐ思想もまた、日本神話・古伝承のうちに強くみられるものであったことは疑をいれない。

このような角度から、ここ大入島おおじまの日向泊(ひうが・ひむか)なる地名の由来について少し考えをのべてみたい。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
(一) 日向・日出などの地名が、お隣りの日向ノ国(ひうが)の専売特許ではなく、全国各地に多くみられる地名

であること、これが太陽の道と関係するものであろうことは、いまさら言うまでもあるまい。

このばあい、当地の大入島・日向泊が、神武天皇の御東征伝説とかかわり、その駐輦れんの伝説をもつことは、神武天皇が近畿に上陸して大和に入ろうとするとき、「太陽に向って闘たかう」ことの不可なるを悟って、熊野まで迂回する道をとったことの伝承とも関係がある。天皇は「日ノ御子」だということなのである。

天皇を「日ノ御子」とすることは、明らかにカリスマの信仰である。しかしこれだけではない。私たちの歴史、日本人のながい歴史的伝統のなかに、太陽を神とする日神信仰がよく根づいていることの証拠でもあるのだ。

お天道（テント）さまを拝む風習がそれである。

あるていど年配者の人たちに聞くと、自分の親がそうだったとか、祖母がそうだったとかの話をよく聞く。私自身のことを記して恐縮であるが、父の仕事のため私は東京で生まれ、東京の麴町（いまの千代田区九段上）で育った。小学校・中学校のころ、毎朝、わが家の門をあけるのが私の日課だった。門の扉をあけ、かんとんに掃くのだが、そのままに、手でポンポンと拍手（かしわで）

をうって、お天道てんとさまを拝むのが習わしであった。私の習慣というより、親からそう躰しつけ（しつけ）られたのだと思う。お正月の初日はつひノ出でを拝みに出かけたり、富士山に登って翌朝はやく頂上で日ひノ出でを拝んだことなどの経験のほかに、このような毎日の習慣としてのお天道てんとさまを拝むことがあったのを思い出す。おそらく昔から、このような生活習慣が、日本人のなかで営まれてきたから、私もそういうように躰しつけられたのに違いない。

お天道さま（お日ひさま・太陽）を拝むということ——古くからの日本人の生活態度——これをどう捉えたら良いのだろうか。

日本神話・古伝承や、あるいは古墳の壁画などにもみられる、「太陽信仰」すなわち天道信仰が、ながく日本人の歴史のなかに生きつづけてきたものとすれば、尚更のことである。

(二) 昨冬いただいた本であるが、重松明久氏の『日本神話の謎を解く』（PHP研究所刊）は、道教の立場からの明察に充ちている良書である。このなかに、英彦山ひこさんを古代日本の崑崙山こんろんさんとして考えられている。宮司さんの苗字を高千穂さんということも紹介されている。

いっぽうまた、日本の古代史に「太陽の道」を求めたものとして、小川光三氏の『大和の原像』、水谷慶一氏の『知られざる古代』などがある。私自身としては、つい最近『大分県地方史』112号に、「豊後の国府、再考」を方位論を主として述べてみたが、ここで小川氏の「太陽の道」に引張られた形で、天道信仰と（都市の）同心円理論とを結合した考察を展開することとなった。

そしてこのことは、さらに日向（ひうが・ひむか）の地名の、正しい理由をもとめる手掛りともなったのである。

日向の地名が、日当り・ヒナタでなくて、ヒムカ・ヒウガであるばあい、これが太陽の道⇨天道信仰とふかく関係するものと知ってみれば、その場所が、どこから見ての日向（ひむか）なのかを探ってみたくなるのは、これは人情の常というものである。

ここ佐伯・大入島の日向泊の地名（ひうが）は、神武天皇の御東征伝説に彩られている。神武天皇が島に立ち寄られ（日向泊）、そこで天皇が御弓のさきで掘られた井戸が「神の井」とよばれていること（東西三尺四寸、南北三尺二寸の広さで、深さは三尺、清冽にして飲料に

適す、とされている）、これらについては『佐伯市史』にくわしい。

天皇が「日ノ御子」とされ、日向の国から出発されたとしても、それだけではなお、此の地を「日向泊」と名付けられた理由としての説得力には十分ではない。とすれば、それに答えられるものは何だ、ということになると、これはまたなかなかむづかしい。神武天皇の伝承は、御東征のことだけでなく、日向の呼び名を説明するための伝承としての力を持っていると考えられたから、古来そういう伝承になってきたのである。神武伝承を否定するのではなくて、さらにこれを補強する形で、説得力をもつ説明は考えられないものかどうか。

そこで先の重松氏の所論と、日本神話とから、高千穂峯を考えてみたい。そしてまた小川氏のいう太陽の道⇨お天道さまの道をも考えてみたい。そうすると、こういうことが考えられるのではないだろうか。

(一) 二十万分の一の地図、また五万分の一の地図をひろげて、しばらくこれとニラメッコをしてみよう。

聖なる高山としての高千穂峯。大分県南境の祖母山から南にある高千穂である。地図によって高千穂神社（日

印)、そのそばに△印がある。ここから太陽の道の線をひいてみる。春分・秋分の正東西線、夏至の東北三十度の線、それに冬至の東南三十度の線が、それぞれ日向・日出の地名にふさわしい位置を示すことになる。いま日向の国(宮崎県)内のことはしばらく措く。そしてわが佐伯の地方に目をそそぐことにしよう。

そうすると、高千穂神社から、その東北に天岩戸神社、そして二ツ岳、さらに泉境の新百姓山ちかくを通って、宇目の中岳から小野市にたっし、上津川をすぎ、左間ヶ岳をかすめ柵牟礼山を通って海岸部で海崎にたつする。

それから大入島の日向泊にと及ぶのである。これをさらに先に延ばすと豊後水道をわたり、伊豫の日振島にとどく。ここにも日(ひ)がある。日振島は、海賊大將藤原ノ純友の根拠地、そしてその次将が佐伯ノ是基だったことは、あまりにも有名である。この辺でもう十分だろう。

高千穂から、夏至の日ノ出線(東北三十度)、太陽の道は、まさしく「日向泊」に達したのである。

日本神話における高千穂のこと、そして神武天皇の御東征のこと。それがこの天道(太陽の道)に生きている

のだ。神武の伝承は、このような意味をもって、この「日向」の地名に関係する。伝承の科学的・歴史社会的証明はこれで十分であろう。

だが、これだけで終ってはいけないのである。さらに驚くべきことがある。

四 重松氏から、古代日本の崑崙山とされた英彦山のことがある。この英彦山のこと、佐伯の北にそびえる彦岳、それを祀った彦宮三所神社が、英彦山神社にあやかったものだとされている(『佐伯市史』にくわしい)が、豊前の英彦山から冬至の線(東南三十度)をひくと、この線ののびた先端が、ここ大入島の日向泊にたつのである。まったく驚き入った次第である。「日向泊」とは、このような天道(太陽の道)線が行きついた交点でもあるのだ。

もう少しくわしく地図をながめてみよう。英彦山から東南三十度の線が、延々とつづいて大分県内をよぎる。

この線が日出生台を通り、日向山をすぎ、由布岳をかすめて、大分の豊後・国分寺にたつしている。これには驚いた。だが驚きはまだつづく。さらに西寒多神社をすぎ、ずっと南下して海部郡に入り、臼杵市の深田石仏をすぎ

るのである。深田の石仏はこういう位置にあるのだ。それから津久見の胡麻柄山・願寺をすぎ、彦岳の西をかすめて、大入島の日向泊にまで達するのである。願寺とはどういう寺だったのか、県立図書館で調べかけたが、なお分らないままでいる。それはともかくとして、この線上にあるもの、ただ驚きの連続である。

さて最後に、それでは東西線はどうなのかと、日向泊から西への線をひいてみた。そうすると、戸穴（ここにも神武伝説の横穴 $\parallel$ 洞穴？ $\parallel$ があるという）、そして大宮八幡宮があり、さらに西して尺間岳・尺間神社をすぎ、菅生駅の東に東光寺がある（東の光という名前も気にかかるところ）。朝地をすぎ、竹田の木原山 $\parallel$ 景行天皇の九州西征の故地である $\parallel$ をすぎ、どこまで延ばしたら良いのか、私自身にも分らなくなった。ただこういうこととは言えよう。少くとも日向泊から西への線で、近いところでは戸穴・大宮八幡、尺間山・尺間神社などの存在は、たしかに神武帝の伝承といい、あるいは後代の修験道場の靈山のことといい、天道信仰と関係ふかいは読みとれる、と。

とにかく、まこと日向（ひうが）の名にふさわしい場

所柄だということである。

(四) 神武天皇御東征の駐輦の伝説「神の井」の伝承が、聖なるものとして語りつがれてきた所以も、ここに求められることが分る。先人の知恵が読みとれるというものである。

日本神話・古伝承のなかに、ことに天皇の名にかかわらせて、天道信仰のことが見えるとすれば、「日向」（ひうが・ひむか）の地名が示すその伝承の真の意味を再発見することができる。そしてこのような線を、ただ地図の上だけでなく、実地に即して、なるべくこの線にそうように歩いてみるのが、歴史の真実をわが身をもって体得するよすがとなるものではないか。私も、もし健康がゆるせば、いつかこの道を歩いてみたい。

— 以上（五九、五、三） —

